KYOKYO 127

特　集　京都教育大学附属教育実践センター機構の開設に際して

― 教育実践研究力を高め結集して、学内外に還元することを目指す ―

京都教育大学

＜表紙＞

『ハワイのホテル』

附属桃山中学校　３年生　美術科切り絵作品　小林 裕生

白黒のバランスを考え、シャープな切り口で、ハワイのホテルを表現しました。両親が泊まったお気に入りのホテル、写真をもとに切り絵で再現しました。細かいところが多く、時間を忘れての作業でした。２学期３ヶ月間をかけての美術科切り絵作品です。

＜裏表紙＞

『2011・卯年。４文字以上で書き初めを！』２年生冬休みの課題です。

『山紫水明』　附属桃山中学校　林 貴菜実

紙面いっぱいの力強い筆運びが、目標実現に向けてのたゆまぬ努力を誓っています。

『理想の実現』　附属桃山中学校　渡辺 梨紗

流れるような筆遣いが、理想の実現に向けての新たなる決意を表しています。

『歴史に学ぶ』　附属桃山中学校　中山 智香子

何事にも真剣に取り組む様子が、一字一画の丁寧な筆遣いに表れています。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY ACCREDITED
Mar. 2007

CONTENTS

広報第127号

＜表紙＞　附属桃山中学校　３年　小林 裕生
＜裏表紙＞　附属桃山中学校　２年　林 貴菜実
渡辺 梨紗
中山 智香子

特集

2　**京都教育大学附属教育実践センター機構の開設に際して**
―教育実践研究力を高め結集して、学内外に還元することを目指す―
附属教育実践センター機構長
安東　茂樹

海外見聞録

10　**ネパール・カトマンドゥだより**
社会科学科准教授
土屋　雄一郎

留学生の声

12　**夢を叶える日本**
大学院障害児教育専攻
呉佳謙
ゴ　カケン（台湾出身）

研究余滴

13　**子どもが発することばと美術鑑賞**
―イメージの存在―
美術科教授
石川　誠

京教今昔物語

15　**わたしに　そのとき！？　何が！？**
京都教育大学客員教授
多田　光利

京教学内探訪

17　**全学共通自習室の紹介**
教務課教育グループ
鈴木　孝範

附属学校園だより

19　**継続する飼育の保育**
―小さな生き物が暮らす幼稚園―
附属幼稚園副園長
鍋島　惠美

20　**「先進と伝統」**
附属桃山小学校副校長
西井　薫

21　**一連の校舎耐震改修工事を終えて**
～附属桃山中学校北・中校舎が強く美しく生まれ変わりました～
附属桃山中学校副校長
髙木　英男

新任の先生から

22　教育支援センター准教授
関口　久志

卒業生の声

23　**出会いからの支えあい**
京都市立明徳小学校・教諭
清水　一希

23　**子どもたちと一緒に**
京丹後市立溝谷小学校・教諭
小西　由貴

ようこそ大先輩

24　**臨海施設と海のかび**
京都教育大学名誉教授
土倉　亮一

読者の皆さまへ・編集後記

25　地域連携・広報委員会委員長
武蔵野　實

京都教育大学附属教育実践センター機構の開設に際して
ー教育実践研究力を高め結集して、学内外に還元することを目指すー

附属教育実践センター機構長　安　東　茂　樹

学長挨拶　位藤紀美子

平成22年（2010）8月、京都教育大学附属教育実践センター機構を新たに開設いたしました。本学における教育実践関連の研究センター、①教育支援センター　②環境教育実践センター　③特別支援教育臨床実践センター　④教育臨床心理実践センター　の4つを統合し、相互の連携強化を図るための機関です。

京都教育大学における教育実践関連の研究機関としては、前身の京都府師範学校＜明治9年（1876）創設＞を受け継ぎ、昭和24年（1949）「教育者の養成を主とする」新制国立京都学芸大学が発足した後、昭和26年（1951）「教育研究所」を設置したことに始まります。本学独自の目的を遂行するために、学部と附属学校園の全教員が所員となって教育の理論と実際を研究する組織として誕生しました。おそらく、当時全国にも少ない先駆的な研究機関ではなかったかと思います。この教育研究所を中心に、いろいろな共同研究がなされました。昭和50年代には、教育研究所主催で全国大会を開催し、各教科教育部会がそれぞれの研究成果を2年間に分けて発表しました。その基本方針は、昭和55年（1980）教育研究所廃止後、附属教育実践研究指導センター（附属教育工学センターの転換）に引き継がれることになりました。

その後、時代の推移に伴う社会の要請により、教育実践関連の研究センターが次々と新たな目的のもとに設置されました。初期は、学内の学部と附属の連携を強め、本学の使命である教育実践研究力を高め学内に還元していくことを中軸としていましたが、次第に学外の教育委員会や公立学校等の地域社会との連携協力の機能が求められるようになってまいりました。従来の基本となる機能を受け継ぎながら、現職教員の研鑽の機会や場の提供など多様な要請に対応するために、環境教育や特別支援教育に関わるセンターができ、また臨床心理の分野を設置するなど内部組織も変更を重ねてきました。

法人化後、第Ⅱ期中期目標期間に入った現在、第Ⅰ期の成果と問題点をふまえ、学内のいっそう緊密な連携協力のもとに、学外の地域社会とより活発な連携活動に取組み、本学の社会的な責務をはたさなければなりません。そうした事情から、多様化高度化してきた各センターの機能をセンター機構として高いレベルで統括し、大学と地域社会との連携活動をいっそう強化することにいたしました。

これまで教育実践研究関連センターの設置や運営にご尽力くださいました方々、並びにこのたびセンター機構開設に力を尽くしてくださいました方々に心から感謝申し上げます。戦後、新制国立大学として出立してから、また最初の教育研究所設置から約六十年後の再出発となります。改めて、このセンター機構が新たな機能を発揮し、学内外からの要請に応えていけるように、まず学内の教職員や学生のひとりひとりの協力をお願いいたします。併せて、教育委員会や公立学校等関連諸機関、地域の方々のご理解とご支援を賜りたくお願い申し上げます。

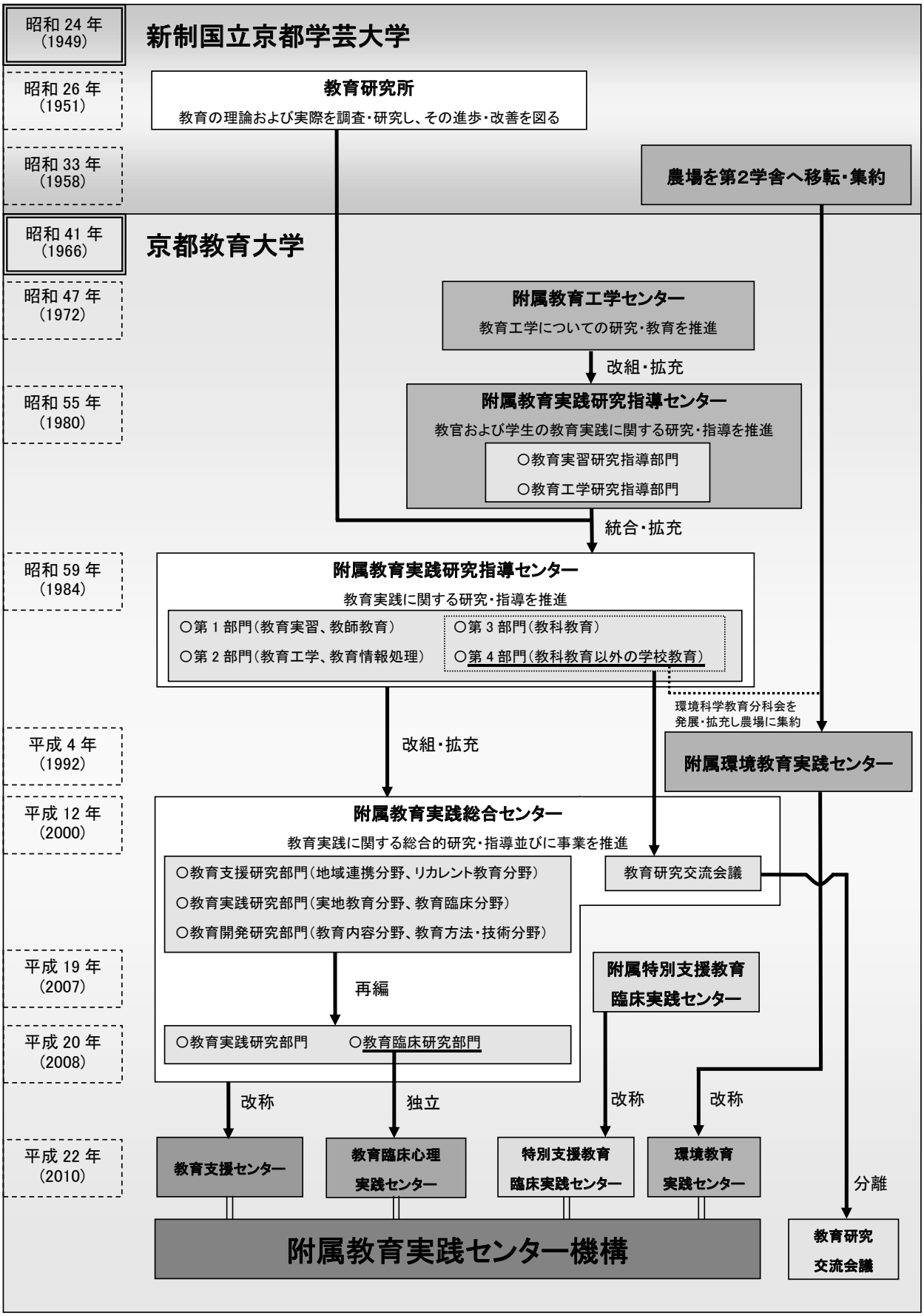
機構長挨拶　安東茂樹

京都教育大学におけるセンターは、教員養成における教育理論の実践化と具現化を図り、様々な教育課題に対処するため、教育現場での指導方法の確立や実践を通した理論構築などを先導的に推し進めています。それぞれの機能を系統的および有効に発揮するために、本学の教育実践に関する4センターを統括する『附属教育実践センター機構』を平成22年8月1日に設置しました。

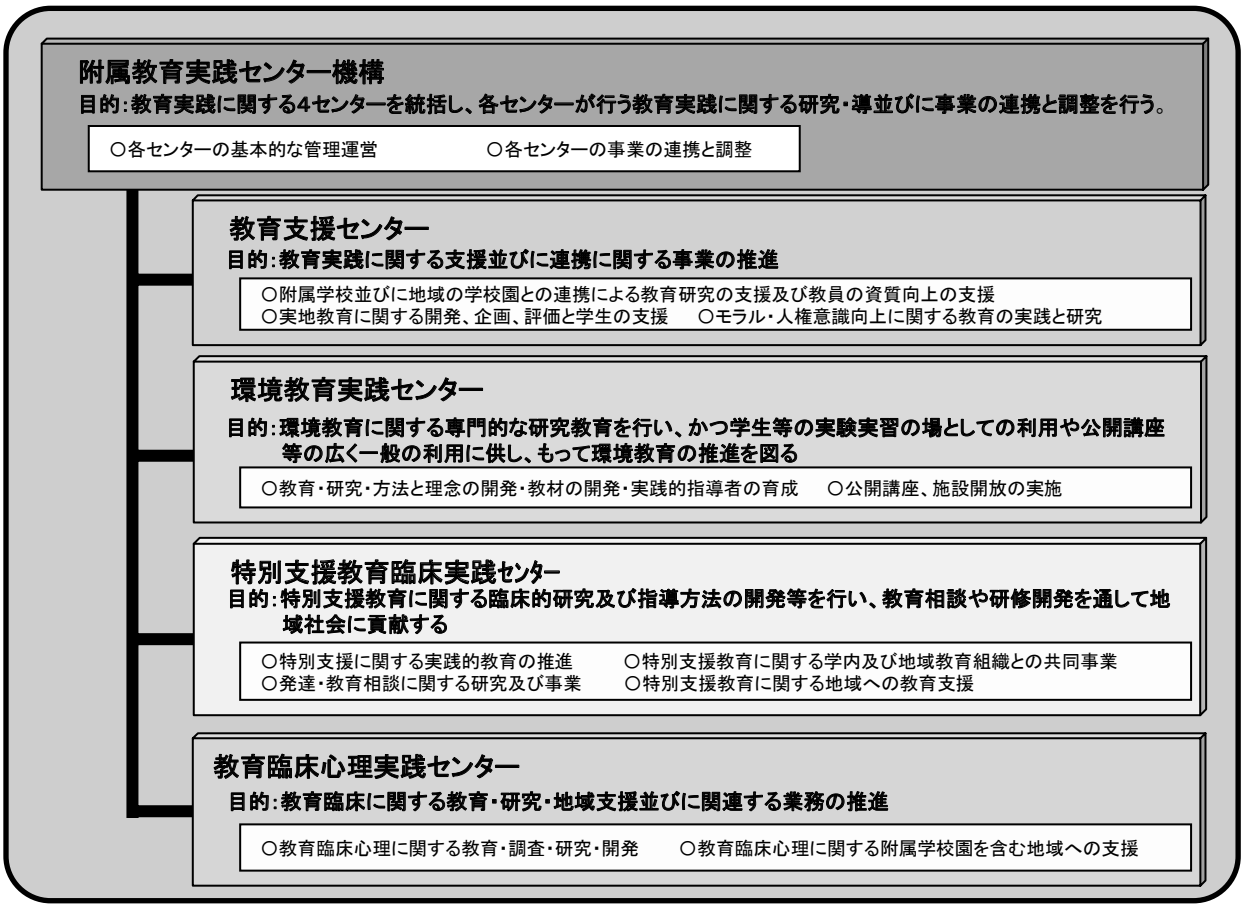
『附属教育実践センター機構』の目的は「4センターを統括し各センターが行う教育実践に関する研究･指導並びに連携と調整を行うこと」とし、その業務を「基本的な管理運営に関すること」「事業の連携と調整に関すること」「その他必要と認める業務」と定めました。そして、附属と近隣の学校園並びに地域社会への教育支援、実地教育の開発・企画・評価、環境教育の理念と方法の研究及び開発、発達･教育相談に関する研究や事業、教育臨床心理に関する教育・研究などに対応できる体制を整え実践します。

センター機構として、現代の教育課題や諸問題に対応し、即今日や明日からの実践に有用で対応できるシステムを整えるとともに、5年後そして10年後の教育の在り方について課題追求する重要な責務を担いま

す。今後、我が国の将来を見据え、人間形成の一躍を担う教育実践を目指して、各センターで多様な業務を受け持ち、その役割を果たす拠点としてその尽力に努めます。



附属教育実践センター機構の歩み



附属教育実践センター機構の組織図

各センターの紹介

教育支援センター

教育支援センターには教育実践連携部門、実地教育部門、モラル・人権意識向上教育部門の3つの部門が設置され、それぞれ「附属学校園並びに地域の学校園との連携による教育研究の支援及び教員の資質向上のための支援」、「実地教育に関する開発、企画、評価と学生の支援」、「モラル・人権意識向上に資する教育の実践と研究」をテーマに活動しています。加えて京都府・京都市教育委員から派遣された特任教員が配置され、教育実践、教育委員会との連携などの分野で活躍しています。また、公立学校でのボランティア活動を希望する学生のために地域支援推進室を、留学生の勉学と交流を支援するために留学生交流演習室を設けています。その他、教育実践研究紀要の発行、シンポジウム等の主催、プロジェクト支援、大学教員と附属学校教員の研究交流を目的とした教育研究交流会議の主催、留学生と地域との交流会、地域に開かれた学習交流会の開催などを行っています。これらを通じて、教育実践に関する支援と連携を推進することを目的としています。

教育支援センター

環境教育実践センター

環境教育実践センターには、環境教育の推進を目的として、環境教育に関する専門的な教育を行う教育研究部門、広く一般の利用者に施設を開放し、公開講座や研修等を推進する公開部門の2つの部門が設置されています。主な業務として、①環境教育に関する教育及び実践、②環境教育の理念と方法の研究及び開発、③環境教育に関する実践的指導者の養成、④環境教育に関する公開講座等の実施、⑤環境教育教材の研究及び開発、⑥環境教育に関する施設・設備の開発、⑦実験園・見本園等の育成及び管理を行っています。また、センターに自然環境教育領域、社会環境教育領域、生活環境教育領域、野外教育領域、生物生産教育領域の5つの領域を設置しており、各領域に所属する教員はそれぞれの専門分野を生かして、多岐にわたる環境教育を推進しています。

主な事業として、環境教育ならびに環境教育実践に関する論文および報告を掲載する環境教育年報の発行や、京都市教育委員会との共催による現職教員向けの環境教育研修講座の開講、一般市民に対する公開講座や公開講演会の実施のほか、免許更新講習も選択領域の一課題を毎年担当しています。また、環境教育実習園における栽培学習園では通年にわたって様々な植物を管理・栽培し、学生や附属学校園等の生徒、園児等の体験学習に利用されています。さらに地域社会と連携して、環境教育有機物リサイクルシステム実験実習棟に設置されている有機物リサイクルシステムにより、栽培後の残渣や生ごみ等から堆肥を作製し、栽培学習園での作物の栽培に利用するという「食の循環」の教育についても推進しています。この他、「環境共生園」と称した自然との共生を目指した森をつくる作業が進んでいます。

環境教育実践センター

特別支援教育臨床実践センター

特別支援教育臨床実践センターは平成19年、これまでの特殊教育から特別支援教育へ転換された「特別支援教育元年」とも呼べる記念すべき年に設置されました。本センターの目的は、特別支援教育に関する臨床的研究及び指導方法の開発等を行い、教育相談や研修活動を通して地域社会に貢献することです。主な業務は、①特別支援に関する実践的教育の推進、②発達・教育相談に関する研究及び事業、③特別支援教育に関する学内及び学外教育組織との共同事業、④特別支援教育に関する地域への教育支援の4つで、その達成のため、教育委員会や医療機関、福祉関連機関などとの密接な連携をとり、常に最新教育科学に基づく特別支援教育を展開し、障がいのある子ども一人ひとりの「教育的ニーズ」を追求しています。

特別支援教育臨床実践センター

☆発達相談

本センターでは障がいのある子どもや発達の遅れが疑われる子どもの発達・教育相談を行い、発達像および障がい像を明らかにして、養育／教育の手掛かりを得たいと考えています。主な相談内容は、以下の通りです。

●発達に関する相談
言語、運動、手遊び、身体の成長など

●行動／性格に関する相談
こだわり（固執）、不安、緊張、注意散漫、多動、神経質、自傷、他害（他傷）など

●養育／保育／教育に関する相談
生活リズム、集団行動、学習困難、対人関係、家庭と関係機関との連携、地域生活など

●医療に関する相談
発育、食事や排泄など医療相談一般

本センターでは、本学障害児教育専攻および教育・発達心理学専攻の大学院生が継続面接を担当させていただく場合や、特別支援教育特別専攻科の学生および発達障害教育専攻の学部学生が観察させていただく場合があります。 本センター教員および担当教員が責任を持って指導し、相談内容についての秘密は厳守いたしますので、お気軽にご相談ください。

教育臨床心理実践センター

教育臨床心理実践センターは、①教育臨床心理に関する教育②教育臨床心理に関する、附属学校園を含む地域への支援③教育臨床心理に関する調査・研究・開発の3つの活動を柱としています。その主な事業として、「心理教育相談室」での相談活動、心理教育相談室紀要の発行、カウンセリング研究会の開催、教育臨床心理関係のシンポジウム・ワークショップの開催、附属学校・公立学校への教育臨床心理的支援（大学院生や学部生の派遣）、免許更新講習・教職セミナー講義等への支援などを行っています。これらの活動を通じて、教育臨床心理に関する教育・研究・地域支援の推進を目的としています。

教育臨床心理実践センター

☆心理教育相談室

本センターは「心理教育相談室」を設置し、個人・家族・学校などの悩みや問題について教育臨床心理的支援を行っています。主な相談内容は、以下の通りです。

●教育に関する相談
不登校、いじめ、友達関係の問題、学習困難、非行など

●発達に関する相談
子どもの習癖、チック、夜尿、発達上の問題、育児の問題など

●人間関係に関する相談
家族関係や職場の人間関係の問題など

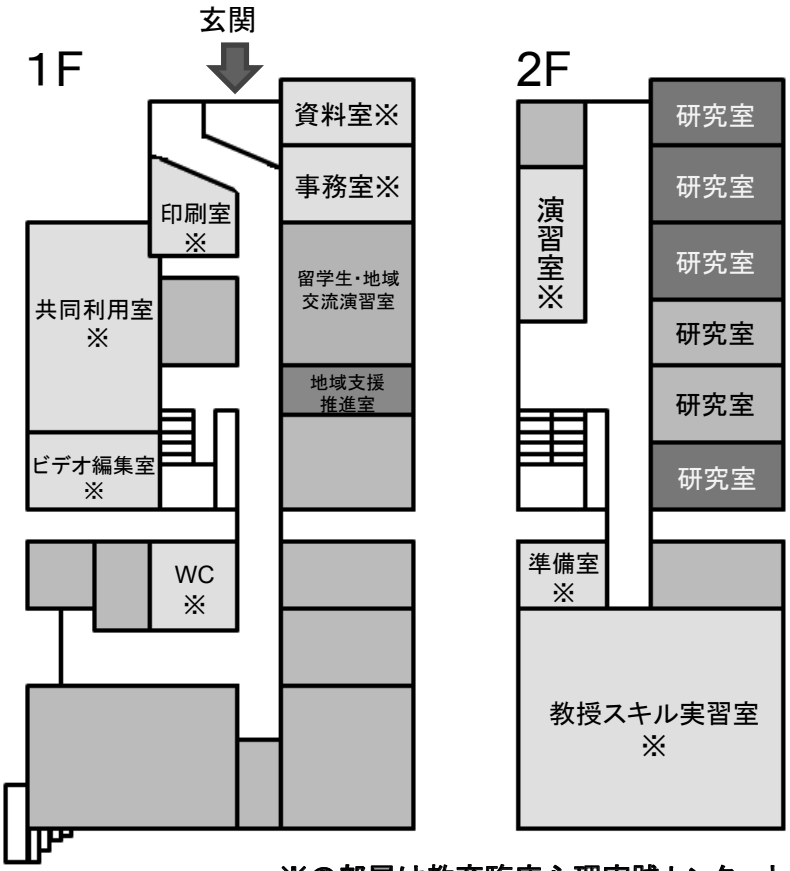
●行動・性格に関する相談
不安・緊張、情緒不安定、不眠、無気力、食行動、性格上の悩みなど

●自己理解に関する相談
自己の内面的成長、対人関係の豊かさの探求など

本相談室は大学院の実習機関でもあり、大学教員や臨床心理士の指導のもと、大学院生や研究員が中心となって相談にあたっています。相談内容についての秘密は厳守されますので、お気軽にご相談ください。

施設の案内

ここでは、各センターの中をご紹介します。教育支援センターでは、地域支援のボランティア活動推進のための地域支援推進室、留学生支援のための留学生・地域交流演習室を備え、環境教育実践センターは屋内外の両方で実験実習ができるよう、屋外には栽培学習園や水田等を、屋内には各種実験室を備えています。この他、自然の恵みを利用できるよう、地下には水田や栽培学習園の植物の潅水に利用するための雨水を貯える雨水槽(約70t)を、屋上には太陽光発電設備を整えています。個別相談を主要事業の一つとする特別支援教育臨床実践センターおよび教育臨床心理実践センターでは、受付、相談室、プレイルームが設置されるなど、各センターはそれぞれの目的に応じた設備が用意されています。



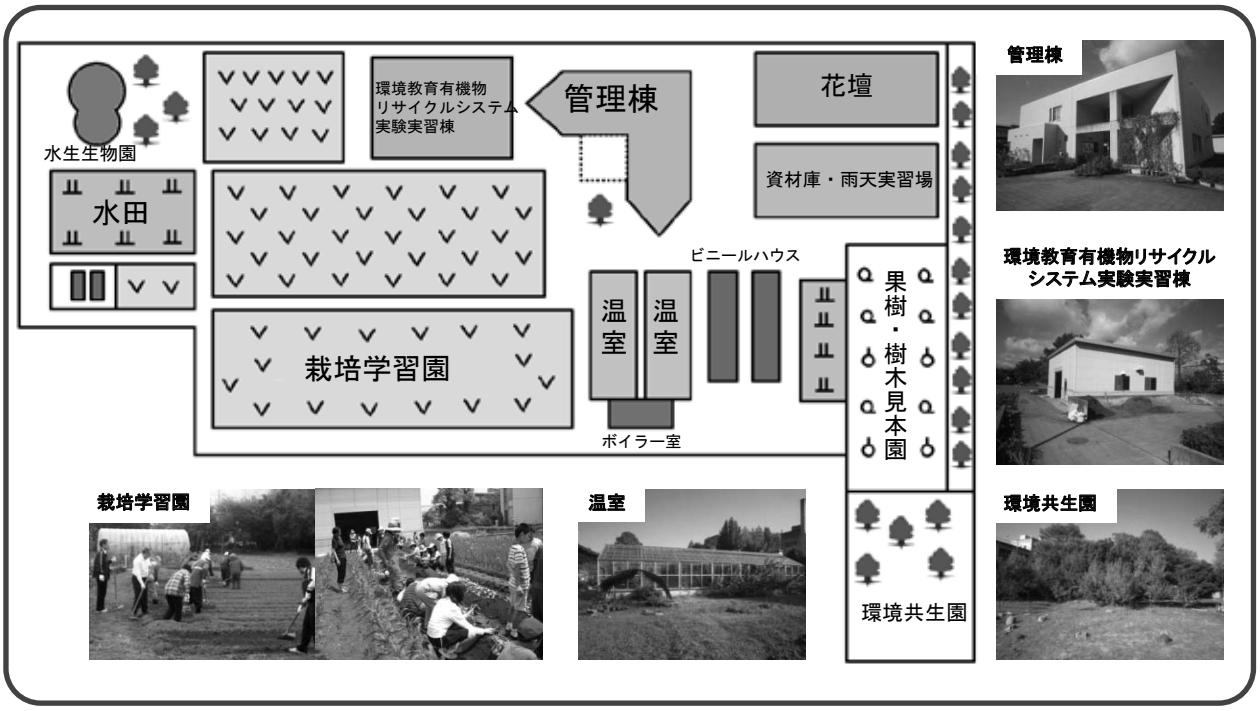
共同利用室

留学生交流地域交流演習室

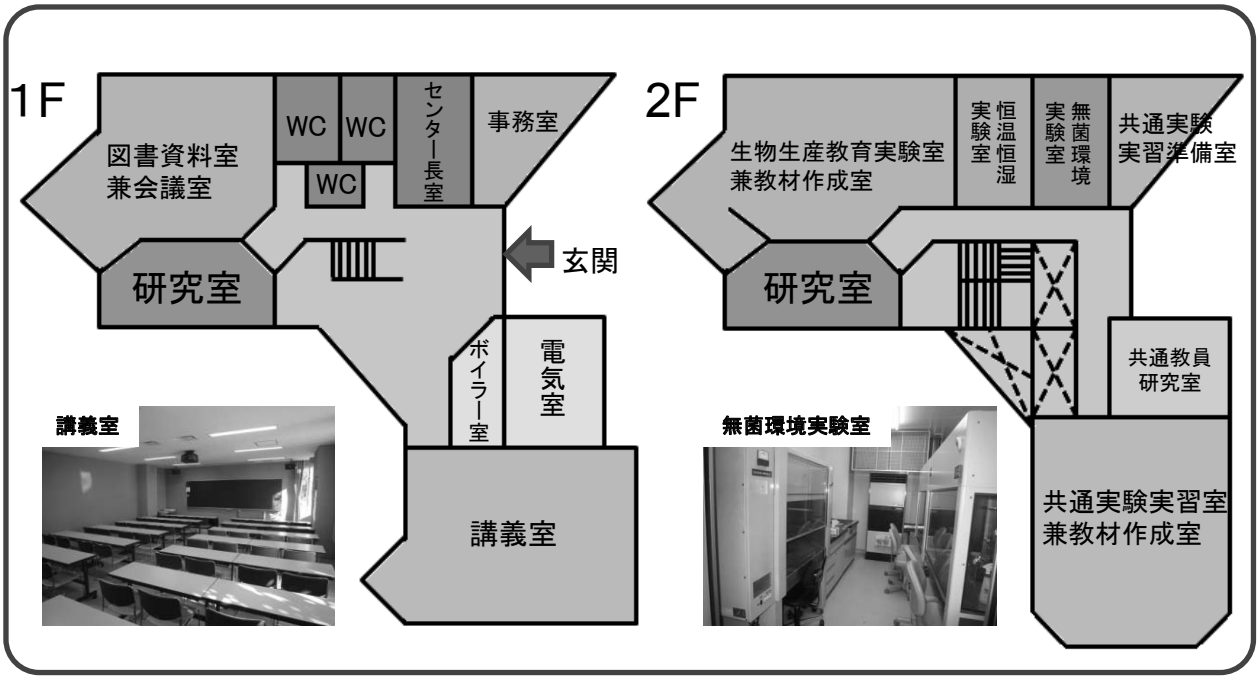
地域支援推進室

※の部屋は教育臨床心理実践センターと共用します。

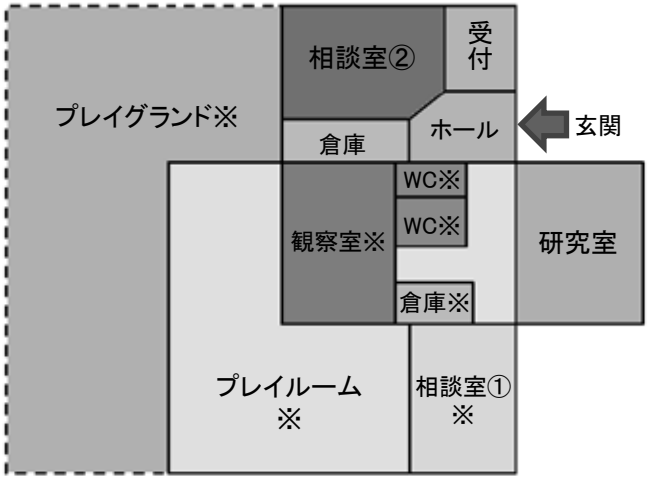
教育支援センター内の見取図



環境教育実践センター敷地内の見取図



環境教育実践センター管理棟内の見取図



観察室

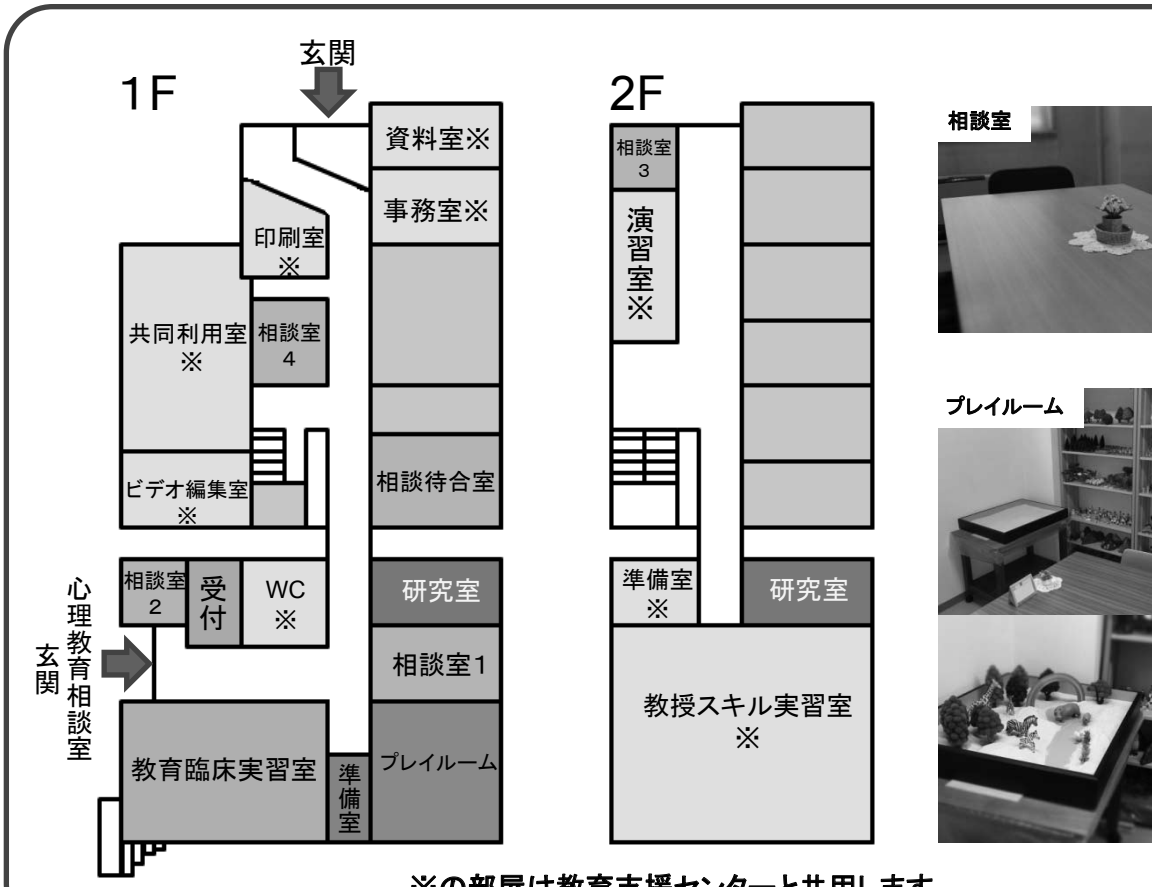
プレイグランド

相談室

プレイルーム

※の部屋は本学発達障害学科と共用します。

特別支援教育臨床実践センター内の見取図



相談室

プレイルーム

※の部屋は教育支援センターと共用します。

教育臨床心理実践センター内の見取図

ネパール・カトマンドゥだより

社会科学科准教授　土　屋　雄一郎

5年前、この国をはじめて訪ねて以来、自然環境に、歴史や文化の埋め込まれた風景に、そして生活にむきあう人びとにみなぎるパワーと人柄に惹かれながら夏と春、年に2回ほどのペースで訪問を重ねている。「バックパッカーの聖地」としても知られる地で、友人の勧めもあって日ごろから取り組んでいる「ゴミ問題」について調査を始めている。王宮といくつもの寺院が立ち並ぶ広場が朝焼けに輝く早朝、町外れにある清掃事務所を出発するゴミ収集車のあとを追いかける。収集トラックの鳴らすサイレンとともにゴミを捨てに集まってくる人びと、その荷台の上でテキパキと仕事をこなす作業員、チャイを飲みながら休息をとる運転手、彼らの様子をメモにとりながらダンプサイトに向かう。行政の担当者を訪ねたり、最終処分場で働く人たちに話を聞いたりとできるだけ「現場で感じる」ことを大切にしているが、なかなか難しい。その進みは牛歩の如くだが、多くの友人に支えられながら、物事を考えている。

世界の屋根、ヒマラヤに抱かれた南アジアの小国ネパール。変化に富んだ国土、北海道の1.8倍ほどの面積に30以上もの民族、3000万人弱の人びとが暮らしている。気候は、複雑な地形を反映して熱帯から寒帯までの幅広い気候帯をもち、砂漠状の乾燥地から多雨湿潤地まで多様で、東、西、南の三方をインドに、北は中国チベット自治区に接している。国境を接するこれらの国の文化、ヒンドゥー教的な価値観やチベット仏教の世界観に影響を受けながら、ネパールでは独自の歴史や文化が育まれてきた。とくに中世の時代、カトマンドゥ、パタン、バクタプルの3王国が栄えたカトマンドゥ盆地には、古くからこの地に住み、建築や美術に秀でたネワールの人びとの手によって重厚で華やかな都市文明が築きあげられ、その名残を今も見ることができる。

「人よりも神々のほうが多く住む町」といわれるカトマンドゥ盆地だが、1990年の民主化以降、都市化とともに人びとの日常生活における「物質化」が進むなど、社会の変化は著しい。この国を訪ねるツーリストや登山家の多くが最初に足を踏み入れるカトマンドゥ市は、標高約1300mに位置し、かつてカンティプール（「栄光の都」）と呼ばれた政治・経済の中心地である。今では、神さまよりも人間のほうがずっと多くなってしまったからなのだろうか、小国の首都は深刻な「ゴミ問題」に直面している。最終処分場の周辺住民によるゴミの搬入拒否運動によって市内での収集が滞り、街区のいたるところでゴミが山積みのまま放置される事態が続いている。これに対し市当局は、人びとが「聖河」と呼ぶバクマティ河の川沿いに設けられたダンプサイトに廃棄物を投棄し急場を凌いでいるものの、この地には以前から大量のゴミが捨てられてきており、河川の汚濁や土壌の汚染など周辺環境や住民の健康への影響が懸念されている。1980年代後半以降、ドイツや日本のJICAをはじめ、国際機関などによる援助が継続的におこなれわれ、問題の解決に向けたさまざまなプロジェクトが展開されてきた。しかし現実の困難は、相当に厳しい。

かつての日本がそうであったように、都市におけるゴミ問題は、まずは公衆衛生問題としてたち現れるといっていいだろう。そういった意味では、カトマンドゥ盆地にみられるゴミ問題も例外ではない。現在、当局は、海外の援助機関が提案する「近代的なゴミ収集システム」の受け皿として、ゴミを処理することでしか生計を立てることが許されなかった人びとを環境局の職員として優先的に雇い公務員として身分を保障する一方で、市民に対する教育・啓蒙活動を積極的に展開している。にもかかわらず、バクマティ河の川沿いには、スモーキーマウンテンが形成されつつあり、鉄くずや非鉄金属、プラスチックなどを素手で拾い集めそれを回収問屋に運び入れ収入を得る人びとの生活がたしかに存在する。雨季に入るとすぐにぬかるむ川

［写真1］パタン王宮広場

［写真2］朝の清掃事務所

［写真3］街路にゴミを捨てないよう啓発するポスター

沿いの道の両脇には、さながら「リサイクル街道」とでもいうべき風景が広がり、彼らの営みが物質循環の底辺を支えている。

現在、ネパールでは憲法により社会のなかで相互に秩序づけられた排他的な社会集団である「カースト」による差別は禁止されている。しかし社会慣行としては、この制度がネパール社会の基礎を成し人びとの考え方や行動の基準として承認されている現実を知ることは難しいことではない。しかしその一方で、こうした抑圧的な制度が、自己のアイデンティティを自覚し、ときに他者からそれを付与されることで権利の実現を図るために彼らを結束させている側面があることも事実である。民主化以降の動きのなかで、カースト制に支えられてきた物資の社会循環が、都市的生活様式への転換のなかで様変わりし、資本主義的な価値観に縁取られた人びとの剥き出しの欲望が新たな周縁部を生み出していることからもわかるように、ゴミ問題は単に廃棄物の処理に関わる困難を意味するだけにとどまらない。

かつて、カトマンズ盆地で暮らす人びとは、おもに生ゴミを「サガー」と呼ばれる穴に置き、これを堆肥化して利用した。このプロセスにおいて、「ポデ」と呼ばれる人たちが都市近郊の農民（需要）と都市居住者（供給）とをつなぎ、「サガー」を維持管理するジャーティーとして重要な役割を担ってきた。「ガー」とは穴の意味で、他にも灰を入れておく「ノガー」、広場や街路などにあって儀礼などで使用した花飾りや供え物などを入れる穴や神さまが隠れるそれなど多岐にわたっていて、彼らの生活世界に埋め込まれていた。建物の1階は商店や作業・収納空間、2～3階は寝室や居間、最上階は神聖なかまどや台所にある家屋で、サガーは四角く囲まれた居住区の中庭に掘られていた。

しかし1980年代半ばにドイツのゴミ処理システムが導入されると、これらは使用されなくなり、建物の増築や改修の際に埋められてしまう。人びとは、新たに設置されたコンテナにありとあらゆるモノを捨てる（ドゥワンチョウ）ようになり、「ガー」は日常生活の場面から切り離されていくことになる。現在では、その形跡だけでなく人びとの記憶からも消えつつある。「小さなガー」から「大きなガー」（最終処分場）へ。それが、地価の高騰をもたらし、堆肥の供給先であった都市周辺の農地を次々に宅地化し、ライフスタイルを大きくさせた1990年以降の社会変動と重なっている点はたいへん興味深い。

幾重にも張り巡らされた社会関係のうえに成り立ってきたカトマンドゥ盆地におけるゴミ処理の仕組みは、近代的なシステムの導入によって大きな変化を遂げつつある。廃棄物処理をめぐる環境が危機的状況にあるなかで、諸外国の援助によって技術的あるいは教育的なプログラムの重要性が今後さらに増していくだろう。各地でNPOの指導による生ごみのコンポスト化やプラスチック類の分別回収などの取り組みが草の根レベルで実践されている。しかしだからこそ、廃棄物処理をめぐる社会関係のあり方やその来歴を「ゴミ問題」を定点に問い、「民主化」・「都市化」・「物質化」をキーワードに変動を遂げるネパールの社会の姿をとらえてみたいと思いを馳せている。

関西空港に降り立ち、大阪の街を歩きながら、整然とした街路の風景、車や人の流れ、行き交う人びとの表情や忙しなさ、「あたりまえ」の景色からまるで取り残されたような虚無感。それは、道路に溢れるクラクションの洪水、隙間を見つけては我先にと進む車やバイク、人の群れ、よりよく生き抜くために感情を露わに交渉する人びとなど、なにもかもが混沌としており、猥雑でありながらある種の「秩序」が生み出されているような空間にみなぎる「力強さ」とは対照的に、どこか飼いならされた日常に戻ってきたことに気づかされる瞬間である。その思いが、再びネパールへの旅立ちを誘うのかも知れない。

夢を叶える日本

大学院障害児教育専攻　呉佳謙
ゴ　カケン　（台湾出身）

飛行機が関空の滑走路の上をゆっくりと滑走している間、本当に日本の土地に足を踏み入れたこと、これからこの国で三年もの間、生活することを私は実感しました。時間の経つのが早いですが、今修論を目の前にしているところです。

私は台湾台北では特殊教育学部で障害児教育を専攻にし、卒業後、台北市小学校で教師として働いていました。なぜ、日本に留学してきたのかよく聞かれます。初めて個人旅行に行ったころ東京で楽しい五日間を過ごしました。そのきっかけに、日本に深い関心を持つようになって、趣味として日本語を学び初めました。でも新聞や雑誌だけでは日本の姿を全面的に知ることはできません。日本に留学された先輩から京都地域で発達心理学の研究が進んでいることが分かり、そして日本文化・歴史の中心の町京都に住みたかったので、2008年に留学を決意し、休職して京都教育大学に障害児教育を研究しに来ました。

留学生として、勉強や生活面で更にいろいろな大切な経験を得ることができました。

研究生の時から、入学試験と日本語の勉強のほかには、京都市内の保育園および養護施設を訪問し、大変印象が深いでした。毎月の保育園の誕生日パーティーに参加し、子どもたちの目の前で人偶劇をやりました。園長先生にクリスマスパーティー、お餅つき大会など他のイベントを誘われて参加いただきました。子どもたちから多く感動をもらいながら、充実した時間を過ごすことができたことを心から感謝しています。

京都教育大学では留学生むけの授業がすくないので、最初は日本人の学生と一緒に日本語で授業を取らなければなりません。苦しいとは言えず、いろんなプレッシャーがあり、想像していた以上に大変だということを実感しています。修士2年生から、修士論文が迫ってきて、論文を書いたり資料となる沢山の本を読んだりすることが必要ですが、初めは日本人でもない私がうまく修士論文を書けることができるだろうか不安がありました。最大の困難点は自分でデータを集めて、データを掘り下げて上手にまとめあげ、そして斬新な議論も組み込んで完成させることです。幸いに日本における多くの方々に協力をいただきました。特に、大学の先生や先輩からアドバイスをいただくことから、支えをもらっています。京都教育大学で勉強できてよかったと思います。

日本の春、夏、秋、冬のうち、私が一番好きなのは春です。来たばかりの春に円山公園の桜を見に行きました。満開の桜を初めてみた時、これからの一年はやる気満々で頑張ろうと思いました。それから、夜桜も見に行って、桜の静かな印象を受けました。そんな純潔と綺麗と静かな桜からはじめ、わたしは日本の自然・美・心を味わっていました。

今、修論に向かって、また博士コースを目指して頑張っているところです。今後、台湾と日本のかけ橋になれ、京都教育大学での研究生活をいかす貴重な経験を用いて、台湾の教育の発展に貢献できるように、努力を続けたいと思います。

子どもが発することばと美術鑑賞
—イメージの存在—

美術科教授　石　川　　誠

だいぶ以前のことになるが、筆者が関係する学会の年次大会の折に、開催大学の学長さんが歓迎挨拶で「学校時代に、美術の見方を教わっておきたかった・・・」と述懐されたことがある。「美術の見方」にはいろいろな見解があるものの、義務教育としては何らかの答えが用意されてしかるべき、と考える方は多いのではないか。筆者は、学校と地域の美術館や博物館の知見を相互に生かすことができれば、コレクションを活用した効果的な鑑賞教育が実現するのではないかと考え、それに向けた理念の構築と実践環境の整備を目指している。そうしたなかで遭遇した、子どもが発する印象的な「ことば」から、美術を鑑賞するとはどういうことか、いくつかのエピソードを紹介しながら考えてみたい。

「いま、水にもぐっている」

2003年、前述の研究に3カ年の科研費が付いて、東京、京都の国立美術館と倉敷の私立美術館とで、学校と協力した鑑賞活動の開発を進めていた。秋に、倉敷の（財）大原美術館を訪ねると、温厚な副館長さんが「石川先生、誰の作品か分かりますか？」と、刷り上がったばかりという一冊の書物を差し出された。表紙には、白地に緑の明朝体で「かえるがいる」と刷られている。同館の幼児鑑賞教室で子どもが発した言葉を、そのまま書物の題名にしたという。大原コレクションにカエルは出てきたかなぁ、いるとすれば池か…、しかしモネの「睡蓮」にカエルなど登場しない。それでも「モネですか…？」と恐る恐る尋ねると正解していたが、冷や汗ものだった。

同書の冒頭にこのカエルのエピソードが載せてある。それによると、保育園児が数人でモネの「睡蓮」（c1906）の前に腰をおろして学芸員と会話しながら絵を見ている。学芸員が「何が描いてあるかな」と尋ねて会話が弾みはじめると、4歳の男の子が立ち上がり、「かえるがいる」と目を輝かせて指さした。「え、どこに？」と尋ねると、「いま、水にもぐっている。」この反応に学芸員は息をのんだ、というのである[1]。おそらく、筆者も同じことを問い返していただろう。この子の頭のなかには、いつか遊んだ、池のなかを泳ぎまわり底に身を沈めるカエルの姿が駆け巡っていたに違いない。子どもの想像の世界をのぞいた気がする。

「何となく…」

小学5年生に浮世絵の鑑賞を試みたことがある[2]。江戸の浮世絵師、東洲斎写楽の役者絵「大谷鬼次の奴江戸兵衛」（1794）である。切手にもなったことがある人気作だ。紅の隈取りをした歌舞伎役者が見得を切る独特の表現がみられる。こうした表現の面白さや特徴は伝わるだろうか。浮世絵と他の絵画様式との区別はできるだろうか、歌麿と写楽の区別は、など知りたいことは山ほどある。

そこで、はじめに複製画を見てそれぞれの感想を述べ合うと、やはり目や眉、口といった顔の部分や手の形がヘンだといった形体上の特徴を挙げる子どもが多かった。デフォルメされ、写実的な絵とは異なるどこか漫画表現に似たものを見ているようだ。そのあと、多様な人物（宗達の雷神も混入しているが）の描写で、目とその周囲だけを残したカラー画像9点を順次見ていった。このなかから、写楽がつくったと思われる作品を選びだそうとするのである（下図は、その際作成したワーク・シートである）。ここには、浮世絵3点が混ぜてあり、それはすぐに判別できた。つまり、

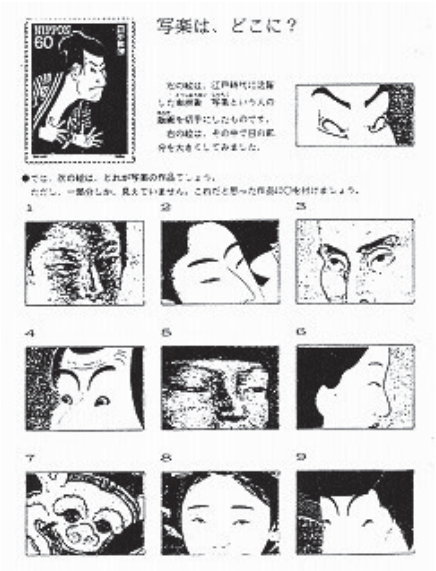


図　「写楽はどこに？」ワーク・シート

版画と他の絵画表現との区別はついたということである。このうち、写楽はどれか？ 2点までは比較的順調に選び出されたが、3点目がどうか議論になった。それが、いわゆる「美人画」と呼ばれた喜多川歌麿「姿見七人化粧（部分）」（1792-93）である（図では、9点並んだ3列の上部中央）。大方は、違うといい、一部の子どもに迷いが残っている。そのうち、目の表現や全体の印象など、いろいろ議論するうちに、どうも違うのではないか、いうことで落ち着いた。理由を問うと「何となく…」ということである。このとき筆者は、写楽と歌麿の表現様式の違いを説明する語彙力は未だ十分ではないものの、感覚的には既に見抜いていることを知らされた。

「何かを示している」

昨年11月に、附属小学校で「授業」をする機会を得た。日ごろ文句を付けていて、ではお前やってみろというところが実情ながら、機会は機会である。教科書にも出てくる日本の名宝、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」（17世紀、建仁寺蔵）を扱い、6年生ということで、少し視野を広げて東西間の文化を感じる鑑賞の提案をしてみようと考えた。

テーマは、「宗達の想像したもの」。宗達の作品づくりからその創造の源は―、発展させて西洋では―と見てゆき、最後に宗達に立ち返り、その作品づくりを考える、という構成にした。そのため、宗達の「風神雷神図」を見た後、それ以前に作られた雷神や風神として「北野天神縁起絵巻（承久本）」（鎌倉期）や三十三間堂の木彫「風神雷神像」（鎌倉期）、ついでに、時代を超えて強いものの象徴「ドラゴンボール」のヒーローと見ていった。ところで、西洋にはこうした神様はいないのだろうかと、ギリシア神話の風神アイオロス、ボッティチェルリの「春」（c1477-8）や「ヴィーナスの誕生」（c1485）に登場する西風のゼフュロスを紹介した。その後で、「風神雷神図屏風」に立ち返り、じっくりと屏風絵を見たのであった。

ある子どもが次のように発言した―西洋の神様には着ているものや飾りに日常の生活が表れているが、日本の風神雷神は何かを示しているようだ。一瞬、この意味を解しかねたが、ルネサンスの人間的でリアルな描写に対し、日本の神々の表現に現実を超越した存在として、どうやら東洋美術の一特徴である、象徴性や精神性を見ているといっては言いすぎであろうか、そうしたものをうかがわせた。そこで、本人に確認すると、「示す」はそういうことだという。舌を巻いた。ほかにも余白の扱いなど、子どもたちには予想した以上の見方のできることが感じられた。語彙の十分でない時期の、ことばの裏にある世界を見落とさないようにすることの重要さを実感した。

＊＊

ここまで、三つのエピソードから、子どもが美術を見る場面における想像力の逞しさやものを見抜く力の意外な確かさについて紹介してきた。発展途上にある子どもの、ことばによる描写力を磨くことは、当然重視されなければならない。同時に忘れてはならないことは、いま持てる語彙のなかで表しえない世界が、既に子どもの中に育っている可能性があることに思いを馳せること、ではなかろうか。H・リード（1955）が『イコンとイデア』で提示した「人間意識の発展において、イメージがイデア（観念・思想）に先行する」[3]という命題、未だ「ことば」にならない何ものか（イメージ）がやがて形となり、文脈を形成して思想を形作っていく、私たち教育に携わる者はその過程に関与していることを意識しなければならない、そう考えるこのごろである。

---

[1] 大原美術館教育普及活動この10年の歩み編集委員会、『かえるがいる 大原美術館教育普及活動この10年の歩み 1933-2002』、（財）大原美術館、2003、pp. 4-5.
[2] 拙稿「鑑賞活動における想像力の関わりについて」『美術教育学』15、美術科教育学会、1994、pp. 21-32.
[3] ハーバート・リード（宇佐見英治訳）『イコンとイデア―人類史における芸術の発展』みすず書房、1957. Read, Herbert（1955）, *Icon and idea: the function of art in the development of human consciousness*, Cambridge: Harvard University Press.

わたしに　そのとき！？　何が！？

京都教育大学客員教授　多 田 光 利

「わたし」は、今から129年前に京都府庁にあった「京都守護職屋敷址」で誕生しました。京都市では、それよりも13年前にわが国最初の「わたし」の先輩が誕生しています。誕生したものの「わたし」のところに先生はおられず、師範学校の学生さんが授業の練習を兼ねて指導に来ていました。明治26年（1893年）になって、ようやく先生が5人来られました。しかし、学級数11に対して5人です。各学級に先生が担任としてつくようになったのは、5、6年後のことです。

明治21年（1888年）、師範学校が上京区寺町荒神口に移ったので、「わたし」も引っ越しました。しばらくして、師範学校の北隣り東桜町に移りました。同窓会の名前にもなっている「東櫻同窓会」というのもこのときの地名からとられています。明治32年（1899年）、師範学校が現在の附属京都中学校の所に引っ越したのに伴い、「わたし」もそこに移りしばらく師範学校の中にいましたが、明治34年（1901年）にようやく木造校舎ができ、今の場所となりました。

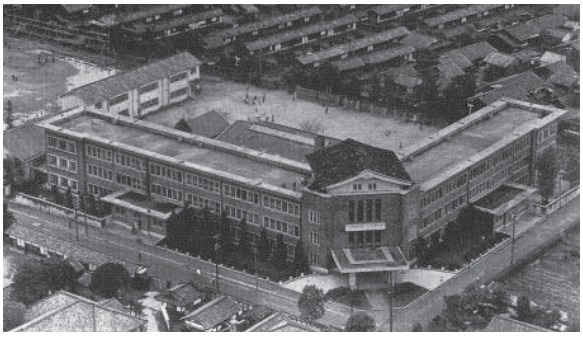
その当時の入口が下の写真です。昭和13年（1938年）まで健在でした。

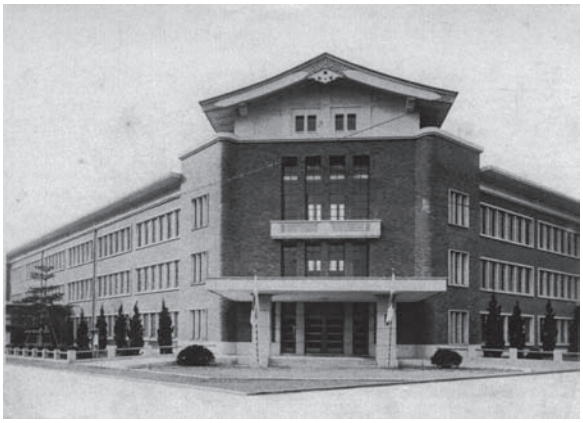
この木造校舎は、現在の鉄筋校舎ができる昭和13年（1938年）まで、ぼろぼろになっているところもありましたが使っていました。その木造校舎でよく覚えているのは、明治37、38年（1904、5年）の日露戦争当時のことです。当時の訓導であった真下飛泉（ましもひせん）先生が児童といっしょに作られた『ここはお国を何百里』という歌のことでしょうか。「わたし」の自慢のひとつです。

大正時代に入って所在地が京都市に編入され、愛宕郡大宮村という地名から上京区紫野御所田町と表記されるようになりました。教育においても「自己表現活動」が大切であると言われるようになってきました。

大正時代でよく覚えていることは、大正7年（1918年）に「第二教室」と呼ばれる特別な学級が作られたことです。児童数は1学級25人で2～5年の4学年、100人の定員でした。昭和18年（1943年）にいろいろな事情で閉鎖されましたが、特徴的なのは『飛び級』があり、小学5年から6年を飛ばしいきなり中学に入学することができることです。

昭和になると、修学旅行にも行くようになったのですが、大きな問題が出てきました。それは木造のため「わたし」自身の傷みがかなりひどくなってきたことです。保護者の方のはたらきもあり、ついに京都府会において「わたし」の大改築が決まりました。昭和12年（1937年）1月18日地鎮祭が行われ、途中様々な難問もありましたが、無事昭和13年（1938年）12月に完成しました。立派な鉄筋校舎で正面塔屋部分には寺院建築の破風を取り付けていただきました。下の2枚の写真はその当時の周囲の様子と正面玄関です。威風堂々としているでしょう。入口には車寄せもあったのですよ。工事にかかった費用は、その頃のお金で34万5千円だったそうです。参考までにお豆腐一丁が6銭という時代です。





昭和16年（1941年）12月8日の真珠湾攻撃から始まった太平洋戦争で「わたし」も名前を「附属国民学校」と変え、金属資源が足りないというので、ロッカーや階段の手すりの鉄棒などを供出しました。児童も田舎の親戚へ疎開をしたり集団学童疎開をしたりで、賑やかな子どもの声が聞こえなくなりさびしい日々を過ごすことを余儀なくされました。しかし、戦争が終わって2ヶ月がたつ頃から疎開していた児童も帰ってくるようになり、少しずつですがもとの状態に戻ってきました。やはり子どもの賑やかな声というのはいつ聞いてもいいものですね。

そして、2年後「わたし」にとってとても大切な出来事がありました。「わたし」から見れば兄貴分にあたる附属中学校の誕生です。昭和22年（1947年）、小学校6年、中学校3年を義務教育とする六・三・三制が始まりました。当初は教室がなく「わたし」が所有している特別教室を提供しました。その後、木造二階建て6教室が建ちました。昭和32年（1957年）、「わたし」の親ともいうべき教育大学が、北区小山南大野町1番地から現在の伏見区深草藤森1番地に移転するのに伴い、附属中学校は「わたし」との同居をやめ、大学の移転跡、現在の場所へ移りました。

ここで少し「わたし」のことばかりでなく、「わたし」の周囲の町の様子を思い出してみようと思います。

近くの北大路通りは今は片側2車線の広い道路ですが、大正の終り（1925、6年）頃はまだ田んぼのあぜ道でした。市電も走っていません。北大路通りができ新町通りが広げられたのは昭和5年（1930年）のことです。そして、昭和30年（1955年）には上京区から北区が生まれ、「わたし」の住所表記がようやく現在と同じ北区紫野東御所田町となりました。

上の写真は、市電が通っていた頃の北大路新町の様子です。

南は今、紫明通りという広い道路になっていますが、その昔は疏水が流れていました。あの琵琶湖から山科をぬけ蹴上を通り川端へと流れている疏水の分線です。

昭和の初め頃までは、水もきれいでカニやアユもいました。子ども達はよく水遊びもしていましたよ。運動場で野球をしているとボールがその疏水分線に落ち、児童が長い棒を使い必死にそのボールを捕ろうとしている姿をよく見かけたものです。しかし、悲しい思い出もあります。昭和10年（1935年）6月の大暴風雨のときだったでしょうか。附属小学校の児童の一人がその疏水分線にのまれて死亡するという痛ましい出来事も目にしました。その疏水分線が紫明通りとして生まれ変わったのは、太平洋戦争のときの建物疎開の結果です。疏水の南側には疎開によってできた空き地が広がっていました。戦争後、都市計画によってそこに道路を通すことになったのです。それが紫明通りです。そのため、紫明通りは大きく曲がっているのです。下の写真は疏水分線があった頃のものです。

いかがでしたか。今回はここまでにしておきます。あとは「百周年記念」や「平成の大改修」などが思い出されます。そもそも「わたし」が130年になろうという歴史の中でいろいろ思い出してみるきっかけになったのは、一人の中年男性の姿を目にしたからです。昨年の3月、もう平成21年度も終わろうとしているある日の朝早く、その男性は私を見上げていました。その表情には寂しさの中にも、どこかある仕事をやり遂げたという満足感がただよっていました。28年間、この「わたし」を見守り、「わたし」の隅から隅までを知ってくれている顔を見つけたからです。

昨年3月附属京都小学校で定年を迎えました。28年もの間わたしを育ててくれたこの校舎に感謝すると同時に今一度、附属京都小学校がたどってきた歴史を思い起こしてみたのが、今回の「京教今昔物語」です。

全学共通自習室の紹介

教務課教育グループ　鈴　木　孝　範

自習室の紹介

平成21年度に開設された1号館Ａ棟1階「共通自習室1A1」、1号館Ｂ棟2階「共通自習室1B1」の全学共通自習室および大学会館3階の電子ピアノ自習室をご紹介します。

1．自習室設置の目的

京都教育大学では、強い教員志望と教員としての適性、資質、情熱をもつ人材を迎える一方、在学中に幅広い見識や判断力と高度な専門性を修得することを目標としています。

この見識や専門性を修得するために、卒業に要する最低修得単位数を135単位（学校教員養成課程）としており、この1単位につき、45時間の学修を必要としています。45時間の内訳は、講義・演習形態の授業では、授業15時間＋自主学習30時間です。すなわち、1週2時間の授業を15週と自主学習60時間（1週あたり4時間）学修し、試験に合格すれば2単位が認定されます。仮に1日4単位の授業を受講すると、自主学習時間は8時間という計算になります。

しかし、平成18年度の総務省調査によると、日本の大学生の1日平均学習時間（土日含む）は3時間30分と国際的な比較からも短く、また、「まったく勉強をしない者」の割合も36．4％と高いことから、大学には、教育方法の点検や見直しを行う他、学習環境の整備を行うことが求められてきました。

そこで、本学では、「授業外での学習指導を充実するとともに、自主的学習のための施設・設備の充実に努める」ことを目的とし、自習室の設置を行うことになりました。

2．共通自習室1Ａ1

共通自習室1Ａ1は、1号館Ａ棟1階南側の入口入って左手すぐのところにあります（図1）。

席数は3人掛け机が4台と2人掛け机が4台あり、計20人分の座席があります。机および椅子は移動式なので、用途によって配置を変えることができます。また、スクリーンを備え付けたホワイトボードを2基設置してあります。

平成23年1月現在、学生からの提案で、パーティションを用いることで、ミーティングや教員採用試験に向けての模擬授業、また大学祭「藤陵際」などの各種イベントや課外活動の準備にグループで活用しやすい配置になっています（図2、3）。

図1．共通自習室1Ａ1・外観

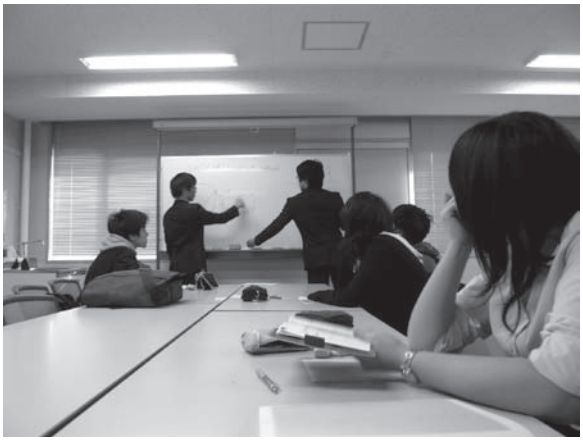


図2．共通自習室1Ａ1・利用風景その1

図3．共通自習室1Ａ1・利用風景その2

図4. 共通自習室1Ｂ1・外観

3. 共通自習室1Ｂ1

共通自習室1Ｂ1は、1号館Ｂ棟2階北側入口の階段を上がって左手すぐのところにあります（図4）。

こちらは、個人用の机が17席（うち1席は車椅子用）あり、各机にはデスクライトとコンセントを設置してあります。講義の予習、復習や各種試験対策などに活用されています（図5）。

4. 電子ピアノ自習室

生協食堂および購買のある大学会館の階段を3階まであがると、電子ピアノ自習室があります（図6、7）。2号館Ｄ棟2階には、すでに19室のピアノ練習室がありますが、ピアノ実技授業の予習、復習や教員採用試験の対策などで利用が集中することがあり、混雑緩和を目的とし、音楽科と教務課の協力のもと、設置されたものです。

図5. 共通自習室1Ｂ1・利用風景

図6. ピアノ自習室・室内

図7. ピアノ自習室・利用風景

こちらは、ヘッドフォンを設置した、電子ピアノ（YAMAHA－DGX630）を10台設置しており、様々な楽器の音やリズムで練習することができます。

なお、平成23年内に2号館Ｄ棟1階へ移転する予定となっています。

5. 利用上の注意

自習室の利用については、①携帯電話の使用禁止、②禁煙、③飲食の禁止、④ゴミの放置禁止などを除けば、入学試験中など特別な場合を除き、常時開放されています。管理者がいるわけではないので、学生の皆さんにより、自主的にマナーを守って利用されています。

利用がはじまって1年以上経ちますが、今後も利用状況の調査などを行い、周知や設備改善など、学生の皆さんと協力して検討していきたいと考えています。

ご要望等ありましたら、教務課までご連絡下さい。

継続する飼育の保育　ー小さな生き物が暮らす幼稚園ー

附属幼稚園副園長　鍋　島　恵　美

【イチョウの樹がシンボル】

私たちの園は、明治18年京都府女学校の師範学科に附属幼稚園として附設、平成16年に創立120周年を迎えています。園庭にそびえる樹齢推定100年のイチョウの樹が園のシンボルです。秋の「こども運動会」も、このイチョウを中心に円周を走ります。競技の途中に、ボタンボタンとギンナンが落ちてくることもあります。それが季節の風物詩にもなっています。「伝統のギンナンひろい」という言葉が卒園生から生まれたりするほどです。

【生き物を飼うのは　なんで?】

それは、幼稚園教育要領総則第1「環境を通して行う」が幼稚園教育の基本であり、直接体験の重要性や経験の連続性が学びへとつながる基盤となるからです。

私たちの園では1950年代から飼育活動が保育の中に取り入れられて、こどもが輪番制で生き物の命をつなぐための世話をしています。現在の世話の内容は、4歳児は小鳥の糞を掃除して水替え餌を与えること、5歳児は飼育小屋を掃除して野菜を切って飼料に混ぜて与えることです。3歳児は、保育室内の飼育物の世話を教師や保護者がするのを見て真似て手伝います。

〈生き物〉という環境にふれて関わり育てる中に様々なドラマが生まれてきます。その感動の一こまを紹介していきましょう。

【飼育小屋に暮らすウコッケイ物語】

ウコッケイが私たちと共に暮らすようになって8年ほどになるでしょうか。春の産卵は孵化させて、その子育て子育ちをこどもと共に見てきました。ところが、今年になって卵をメスが温めるものの孵化しなくなりました。どうもオスの高齢化が一因のようです。そこで、本来は幼稚園で飼育するのにはチャボが適していると獣医師の中川美穂子先生（日本獣医師会学校飼育動物委員会副会長）から教えていただいたので、相談すると自ら自宅産のチャボの卵を届けてくださり、その卵をウコッケイに抱かせてみたのです。すると、「生まれは西東京、育ちは京都のチャボのオス」が誕生したのです!成長するにつれて、姿と風貌に違いがはっきりとしてきました。が、ちゃんと共生しています。秋に生まれ羽が茶色だったことから「栗のクリちゃん」と名付けられました。

【ウサギのウメの物語】

2008年2月14日生まれのウサギのハイが一羽だけでは寂しかろうと、獣医師の先生方のお世話で名古屋から新幹線で子ウサギがやってきました。5歳児が育てることになりました。「ウメ」と名付けられました。子どもたちは、ハイの親ウサギを亡くした寂しさも味わっていましたので、それは心待ちにしていました。休日は、先生が家庭に連れて帰り世話をしました。そこで飼い犬シュートとウメとの共存する関りがうまれました。ウメを敬遠していたシュートが、飼い主が抱っこする姿に、自分の仲間と安心したのか近づいてなめたり、ウメがおいしそうに食べるほし草をある日、口にしたりするようにもなったのです。犬とウサギ、種は違えど、いざこざを起こさず一つ屋根の下に暮らすことができるのは、飼い主が家族の一員として同じように愛して育てているからでしょうか。

【つなぐいのちの保育】

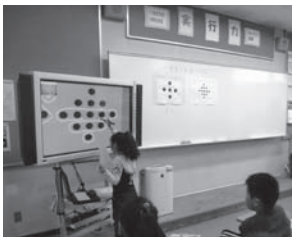
冒頭で述べたように、幼児教育は環境を通して行うことです。その環境のひとつが園内に暮らす飼育物。それは、様々な環境の中で唯一命あるもので世話をしないと死にます。命をつなぐために子どももおとなも世話することを休むわけにはいきません。その中で出会う気づきや驚きや歓喜という感動は、大きく表情や言葉によって仲間の中で表現され響きあいます。その場面に、わたしたちは多く立ち会ってきました。その響きあう感動が、さらに子どもの新たな興味関心へとつながっていくのです。だからやめられません。生き物を育てていく営みを!

今あるものはいろいろなひととの繋がりがあるものも多いです。ウサギのハイは京都市の公立幼稚園のこどもたちから、子ウサギのウメは、名古屋市の公立小学校から日本獣医師会のメンバーの方の連携によって新幹線でやってきました。ウコッケイは、保護者からいただいたものです。育つチャボもしかりです。飼育をすることでつながる命は、人と人とのネットワークも育んでいます。

「先進と伝統」

附属桃山小学校副校長　西　井　　薫

「先進」



今年度から全教室に電子黒板を導入することができた。それを機にパナソニック教育財団の特別研究校指定を受けて、「人間力」を育む研究に取り組んでいる。

大学の浅井和行教授、富永直也准教授にご協力をいただき、白鴎大学の赤堀侃司教授が1学期間に1度、研究について助言してくださっている。「人間力」は大きなテーマであるが、本校の「創造教育」（子どもの側から教育を発想する）を基盤において、言語活動における人と人とのコミュニケーションに焦点をあて

研究を進めている。そして、ICT機器はこの言語活動を助ける一つの道具であるという考えにたっている。今年度は1年目であったので、「全教員が機器を使えるようになる」という目標のもとに研究を進めてきた。毎朝の「スピーチの時間」に実物を投影することから始めて、インターネットを使って必要な映像を利用したり、算数や国語のソフトを使ったりすることで、視覚的にわかりやすい教材提示が出来る

ようになってきた。機器に堪能な教諭は、自分で必要な教材を作ったり、機器に慣れていない教諭は、自分の豊富な経験を生かし必要な教材を若い教諭とチームを組んで作ったりしている。学年が進むと、子どもたちが自主的に機器を活用して学習を進めていくことも出来るようになってきた。ゲーム世代の子どもたちであるので、大人よりも機械操作に慣れて使いこなしている場合もある。教育実習にきた実習生たちも積極的に機器を活用した授業に取り組んでいる。このことは、将来教師になって教育現場に出て行った時、即戦力になるICT活用能力を育てているということになる。

来年度は、今年度の目標「全教員が電子黒板を使える」から、バージョンアップして「みんなが使える学習に役立つ教材づくりをする」に取り組んでいこうと考えている。現状では、少しずつではあるが、作った教材や取り組んだ成果が蓄えられ、みんなの共有財産になってきている。情報に関しては、取り込みや発信の時にはモラルのことを考えていく必要性がある。

「伝統」

グローバル社会になればなるほど、自国の文化を知る必要性があると考える。まず、自国の伝統文化の素晴らしさを心と身体で感じ取ることが大切ではないだろうか。

今年度、「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」（文科省および文化庁の助成）で日本の伝統的な楽器を通して豊かな情操を養いコミュニ

ケーション能力を育成していく取り組みをしている。これも、大学の林美恵子先生にお世話になり、全学年にお箏を指導していただいた。ただ触って音を鳴らすだけでなく、1クラスずつ2時間をかけて姿勢や形にもこだわり暗譜で「さくら」が演奏

できるようになった。本校では、以前から課外学習で「お箏」や「六斎念仏」に取り組んできた経緯があり伝統的な音楽を指導してきている。しかし、今年度は音楽科の授業の中に伝統的な音楽をより積極的に位置づけ、教科課程を構築してきている。また、京都を象徴する「祇園まつり」の「お囃子」にも取り組み始めた。「お箏」「祇園ばやし」「六斎念仏」どれも、「ほんもの（伝承者）に学ぶ」ことが大切であるので、子どもたちに直接指導していただいている。

一連の校舎耐震改修工事を終えて
～附属桃山中学校北・中校舎が強く美しく生まれ変わりました～

附属桃山中学校副校長　髙　木　英　男

北校舎（ホームルームのある校舎）と中校舎（保健室・理科室や家庭科室・音楽科室のある校舎）は、昭和38年（一部昭和43年）に建てられました。築後約45年が経過したため、北校舎は平成18年度に、中校舎は平成21年度に耐震補強工事を行いました。それにともない、内装外装を全面改修し、両校舎とも強く美しく生まれ変わりました。（南校舎帰国生徒教育棟は平成20年度に耐震工事を終えています。）

平成18年度耐震改修の北校舎は念願の全教室空調装置の設置がかないました。玄関ホールには車椅子用リフトを、各階には自習室を設置するなど、全面的にリニューアルしました。また、この校舎は屋上緑化を施すことによる教室の室温上昇抑制や、校舎に降った雨水を地下の「雨水タンク」に貯めて、樹木への散水や自然観察池の給水に利用する「雨水再生利用設備」の設置など、環境に配慮した建物として「地球にやさしい次世代型校舎」のモデルとなっています。

中校舎　外観

平成21年度耐震改修の中校舎は、全教室空調装置の設置はもちろん、家庭科室には12台のＩＨ調理台（被服台兼用）が並びました。ホワイトボード・冷蔵庫を組み込んだ特注の収納棚は、調理実習の利便を向上しました。

中校舎　家庭科室

新美術科室は一回り大きな新品机が自慢です。新しい椅子とともに背面の作品・備品棚が目をひきます。音楽科室は、生徒の元気な笑顔を見ながら授業をしたいという教師の願いをこめてゆるやかな階段状に改修し、最新のオーディオ装置を備えました。新設のレッスン室にも空調を設置しています。1階の2つの理科室は実験台・壁面作業台ともに耐熱・耐薬品に優れた最新のものをそろえました。図書室も受付カウンター付近をＯＡフロアー化し、書籍貸借受付用のパソコンを使いやすくしました。また、中校舎全教室にはプロジェクターを設置し、大型デジタルＴＶとＤＶＤビデオデッキを備えました。同時に、南校舎2階も改修し、パソコン教室とGWS（グローバルワークステーション）教室を隣り合わせにし、学習機能の向上を図りました。48台の新型パソコンの並ぶ教室は、旧教室の約1.3倍の広さになり、快適に情報学習をおこなえるようになりました。

中校舎　美術科室

中校舎　音楽科室

南校舎　パソコン教室

本校は、平常の授業を充実させ、確かな学ぶ力と豊かな人間性の育成を目指しています。また、「豊かな感性、輝く個性、拡がる共生」を合い言葉に、生徒一人一人に活躍できる場がありその活躍を認めあえる仲間がいる学校づくりを目指しています。校舎をはじめとする教育環境整備は、授業の充実、豊かな人間性の育成、活躍できる場づくり、認めあえる仲間づくりのための重要な要素と考えています。

改修した校舎や更新した備品は、生徒たちの学習に生かしてこそ価値あるものになります。平成24年度からの新しい教育課程実施をまえに、今年度からは各特別教室を使用する私たち教職員の出番と考えます。授業改善の提案など、今後とも本校教育推進にご支援をよろしくお願いします。

最後になりましたが、安全で安心な学習環境づくりにご支援をいただきました関係者の皆様に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

新任の先生から

教育支援センター准教授　関　口　久　志

人権に基づくセクシュアリティ教育を専門とする関口です。2010年10月から着任しました。本学出身で、戻れて嬉しい思いです。

さて読者のみなさまは「性」と聞いてどのようなイメージをお持ちでしょう？「恥ずかしい」「卑猥」などマイナスイメージではないでしょうか。わかります、じつは30年以上それを研究してきた私もそれをなかなかぬぐいきれないでいますから。それはおとなも含めて日本ではまともな性の学習を受けてこなかったことが大きな原因です。

性を人権として、自立に不可欠な要素として捉え学習する。これは性での世界的な潮流です。そのためにはは性を大事なこととして肯定し、科学的にみて、ひとりひとりの違いを認め合うことが必要です。

ですから、私は性の学習の目的を「誰しもに人間としての尊厳にふさわしい生命と生活を尊重される基盤を満たし、そのうえで個々人の多様な性の幸福追求権を保障すること」と常々学生に言っています。人権としての性の学習は性のトラブル防止や克服だけでなく、その先の自分なりの幸せ（ウェルビーング）をもたらすものなのです。

論より証拠、大学生の授業を終えてのまとめの感想を簡略化して紹介しましょう。（もちろん公開許可済みです）

「私は性に関する知識が人一倍なく、性に対して強い抵抗感を持つようになっていました。大学生になって今のパートナーと出会っても、抵抗感や壁は取り除くことができませんでした。知識不足が性に対する「恥ずかしい」とか「こわい」というマイナスな思いを生み出していたからだと思います。でも授業を受け、私の性に対する思いや関係性はがらりと変わりました。一つは性に対するマイナスイメージやネガティブな考え方を取り除くことができた点です。もう一つはパートナーとの関係も大きく変わりました。いっしょに授業を受けていたので、正確な知識や考え方を共有できるようになったし、話し合いも増えました。これらによって、私の性への思いも変わったし、お互いが尊重できるようになりました。そして、パートナーが優しくなりました。授業をきっかけに私の意見や思いを尊重してくれるようになりました。月経痛のときには思いやりをみせてくれるようになりました。パートナーのどんどん変わっていく姿は本当に嬉しかったです。私たちは性を学んで明るく素敵な関係になりました」

どうでしょうか。このように性の学習は人間関係の改善をもたらすものです。ほかにも「多様性があるんだから自分は自分でいい、今までの恋人がいないという焦りがなくなった」という友人やメディアからの「恋愛プレッシャー」からの解放などもあります。

性を学ぶことは自他の人権の保障であり、より慎重な行動変容をもたらします。車の運転でもそうでしょう、危険性を知らずそれを避ける知識やスキルを教えられてなかったら無謀な運転になりますね。性も同じです。性のトラブルは性の学習機会の不足が大きな要因になっています。

本学は教員養成系の大学です。私は性の学習を通してみなが幸せになってくれることを望みます。それだけでなく、おとなとして教員として子どもたちに性の幸せをもたらす教育ができるようにもなってほしいとも願っています。

あなたの性をもっともっと幸せにするため、そしてあなたに関わる人と子どもたちの性をも幸せにするためにともに学んでいきましょう。

出会いからの支えあい

京都市立明徳小学校・教諭　清　水　一　希
（社会領域専攻　平成21年度卒業生）

一年前を振り返ると、今頃は卒業論文に四苦八苦しながら、同じゼミや専攻の友人と夜遅くまで研究していました。時には冗談を交え、楽しく過ごしていたのを思い出します。

あれからもうあっという間の一年後。今は小学校の教師として3年生の元気過ぎる子ども達とともに、時には悩みながらも同じように毎日楽しく過ごしています。教師となり一年も経たたない現在。まだまだわからないことばかりの日々ですが、周囲の先生方や保護者の方とたくさんの人に支えられています。もちろん一番の支えは4月から普段を一緒に過ごす子ども達の笑顔です。

さて振り返れば、私が入学した平成18年度は、全学科が教員養成課程に一本化されるなどちょうど大学が変革を迎える時期でした。そのような中で、最初から同じように教師になりたいと思う友人と学び会えたこと、また一回生の頃から学校訪問など実際の現場と関われたことは、高校時代に夢として描いていた教師という仕事を一気に身近なものへと変えさせてくれたように思います。入学当初は中学校の教員を目指していた私が今こうして小学校の教師として現場にいるのは、講義等で同じ志を持つ仲間と議論することを始め、実習やボランティアでの様々な先生方から頂いた言葉、そして何より「教育」についてたくさん考える機会があったからこその選択でした。そこで出会った知識や経験、そしてたくさんの人々の言葉が、現在自分が子ども達と向き合う上での大切な原点となっています。

こうして思い返すと、今も昔もたくさんの人に関わりそして支えられたからこそ今の自分があるように思います。これからも教師生活を続けていけば、数え切れないたくさんの子ども達との出会いがあるでしょう。そんな時に今度は自分がその子ども達一人一人の成長を支えていけるような存在になりたいと思いながら、まだまだ自分を磨きがんばっていきます。

子どもたちと一緒に

京丹後市立溝谷小学校・教諭　小　西　由　貴
（家庭領域専攻　平成21年度卒業生）

大学を卒業して1年が過ぎようとしています。大学での4年間は、講義や部活動、バイトなど多くの人と出会い、様々な影響を受けたと思います。

大学では、1回生での公立学校等訪問研究から始まり、教育実習や実地演習など、実際に学校現場に出向き、子どもたちと触れ合う機会が多くありました。その中でも、3回生の後半から卒業まで小学校でボランティアを行ったことが、教員になろうと決心したきっかけになりました。実際に学校に行き子どもたちと向き合ったことで悩んだり、教員になれるのだろうかと不安になったりしたことも多くありました。しかし、子どもたちの笑顔や、一生懸命頑張っている姿を見ることで、私自身が勇気をもらって、子どもたちと頑張っていきたいと思いました。

4月からは何も分からないまま学級開きをし、慌ただしく1学期が過ぎて行きました。2学期はその反省を生かし、準備をして臨みましたが、次から次へとやってくる行事に追われてしまいました。その中でも、子どもたちとたくさん話し、子どもたちの気持ちに寄り添うことを目指し、朝はできるだけ教室で子どもたちを迎えてあいさつすることだけは続けました。今では、朝の教室で子どもたちと話すことが、私の元気の源になっているかもしれません。

私を「教員になろう。」と決心させたのも、「教員を続けたい。」と思わせているのも子どもたちです。一緒に話したり、勉強したり、時には真剣に気持ちをぶつけ合うこともありますが、この子たちのためにこれからも頑張ろうと思います。

臨海施設と海のかび

京都教育大学名誉教授　土　倉　亮　一

初夏の朝、久美浜の渚では忙しそうにハマトビムシをついばむ千鳥足のコチドリに出会います。

1972年、京都府久美浜海岸に、大学の臨海施設（土地1000㎡、実習棟132㎡）が設置されました。用地は山陰海岸国立公園内にあり、白砂青松、海は遠浅に見えてすぐに深くなり、岸から離れるはげしい流れがあります。沖に漁火、夏はゆらゆらと穏やか、冬は暴浪がほえる海となります。生物学教室では全学生を対象に海浜の植物、海藻、プランクトン、きのこなど、自然を探る夏季実習に、また、毎月数日間、卒論専攻生らと施設を利用させていただきました。なにはともあれ臨海施設の企画、設置、メンテナンスにご尽力された方々に心から感謝いたします。

海水の泡の中に見つけた珠玉

海が荒れると海水は泡立ち、多量の泡が砂浜や岩場に運ばれ、空にも舞い上がります。寄せ波が引くとき淡黄褐色の泡の塊が砂の上に残ります。この泡を実習室で顕微鏡観察し、コロスポラ　マリチマ　という海に住む「かび」の一種の胞子を初めてみたのは1976年11月でした。泡の中には細菌、プランクトン、花粉、羽毛など、雑多な破片が混ざっています。海水の泡ができるわけは、生き物の体からしみでた成分が海水に溶けて、表面張力を低下させ、洗剤のようになって泡をつくり、微粒子を吸着すると思われます。泡の中に35種類の海のかびの胞子が含まれる時もあります。その顕微鏡の視野に、未だ、学名（世界共通の学術的な名まえ）が付けられていない胞子が数種類認められ、それらの珠玉！をわくわくして見つめました。

浜辺の砂を好む海のかび

一生を海で過ごすかびの仲間を［海生菌］という専門用語で呼びますが、この文章では［海のかび］を使用します。1974年当時、浜辺の砂を好むかびは13種類知られていました。砂を好むかびのプロフィールは⇒胞子から芽を出した菌糸が砂粒の表面に広がると、ほぼ球形で、やや堅く、黒光りした母ぶくろ（子嚢殻、大きさ50～400ミクロン）が多数でき、母ぶくろの内部には胞子を8こ育てる小ぶくろが百以上あります。熟した胞子の形は、円筒型（長さと幅、25～150×3～20ミクロン）で両先端がとがっています。海水にであうと胞子を包む薄い膜が縦に裂け、両端に粘質の糸（長さ3～5ミクロン）と中央部をとり巻く腰みの状の糸をつくります。これは海水に浮かび、何かにくっつき易くなるからと考えます。胞子の内部には仕切り（1～11こ）があります。

砂浜には、海藻、木竹、動物の遺体、ポリ製品などの漂流物が打ち上げられ、砂に埋まります。前述のように泡に含まれている胞子がたえず砂の中に混ざっていきますので、埋まった有機物は胞子に囲まれ、胞子から芽を出した菌糸で包まれて分解されます。台風の大波が砂の層を削り、埋まっていた多数の木竹片などが顔を出します。菌糸上にできた無数の黒い母ぶくろが海水にふれると、母ぶくろの口から超元気な多量の胞子が海水と浜砂へ散らばって、すみかをつくります。

各地の海岸の砂から海のかびをつりとる

海水の泡が残された砂をペトリ皿にとりいれて実習室に持ち帰り、砂の表面に清潔な木片（長さ3×5㎝厚さ1㎜）をのせて室温に2カ月ほどおくと、菌糸が広がり、黒い母ぶくろが多数できました。釣竿の針につけるえさをとりかえるのと同じ考えで、砂の上に海藻をはじめ羊毛、鳥毛、稲わらなどをおいてみると、黒い母ぶくろをつくる別のなかまが得られました。

1980年2月から2年間の計画で、日本各地の海辺の砂粒に住むと思われる黒い母ぶくろをつくる海のかびを探すため、北海道から南西諸島に至る72地点をえらびました。北海道は車で巡りました。車のトランクに積む砂が次第に重くなると、不安になり、止まれ、砂泥棒だ、検問されたらどう答えようかと考えながら車をとばしました。本州の日本海側と太平洋側は鉄道を利用し、ひなびた駅に着くと、砂をいれたリュックを草むらにかくして、海岸まで歩きました。駅前に郵便局があれば、砂を速達で研究室へ送りました。合計1467区の砂からかびをつりとる実験を進めた結果、黒い母ぶくろをつくる海のかびの新種5つを全ての区から得ました。海のかびを使って、あれもしたいこれもしたいと計画しましたが、気がつくと退職の年でした。

海のかびの人工培養、菌学会発表

海のかびの培養は、一個の胞子から芽を出し、のびた菌糸を海水を含む寒天の培地に培養します。室温で約2カ月を過ぎると、黒い母ぶくろがつくられ、その中に初めと同じ形の胞子ができるのを確かめました。それまでの研究をまとめ、新種の記載をラテン語と英語で学会誌に報告し、国際学会で口頭発表しました。その一例、コロスポラ　コロッサ　ナカギリ・トクラのようにかびの名付け親になれたのはラッキーです。

この調査研究が遂行できたのは、臨海施設へ200回以上通い、砂浜の酷暑、吹雪、時には砂嵐に耐え、精力的に協力してくれた卒論専攻生諸氏のお陰です。

日本列島は陸も海も生き物の宝庫です。美しい海岸環境が維持されているのは、海のかび、細菌、酵母などが浄化に働いているからです。いつまでもこれらの小さな生き物たちと仲良くしていきたいものです。

第 127 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

127 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 127 号をお届けいたします。本号の特集は『京都教育大学附属教育実践センター機構』です。

平成 22 年 8 月、本学における教育実践関連の研究センター、①教育支援センター②環境教育実践センター③特別支援教育臨床実践センター④教育臨床心理実践センターを統括し、相互の連携強化を図るため、京都教育大学附属教育実践センター機構を新たに開設いたしました。今号では、昭和 26 年（1951 年）に前身となる教育研究所が設置されてから、現在までの機構の沿革・歴史をご紹介します。

なお、今号の表紙を飾るのは附属桃山中学校の小林裕生さんの作品、裏表紙は同じく桃山中学校の林貴菜実さん、渡辺梨紗さん、中山智香子さんの作品です。繊細かつ精巧な切り絵作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　武蔵野　實

京都教育大学

地域連携・広報委員会

委 員 長　武蔵野　實
副委員長　相澤　雅文
委　　員　饗場　知昭　田中　里志　浅井　和行　延原　理恵
　　岡田　直樹　荻野　雄　奥村　真紀　富家　健治
事務担当　企画広報課

京都教育大学広報 第127号

発行日
2011年３月18日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp/